

産地戦略

実施期間 令和7～11年度

実施主体 さぬき米生産推進チーム
都道府県 香川県
対象地域 県下全域
対象品目 水稻



新たに取り入れる環境にやさしい栽培技術の分類

化学農薬の使用量の低減	● 温室効果ガスの削減（水田からのメタンの排出削減）	温室効果ガスの削減（プラスチック被覆肥料対策）
化学肥料の使用量の低減	温室効果ガスの削減（バイオ炭の農地施用）	温室効果ガスの削減（省資源化）
有機農業の取組面積拡大	温室効果ガスの削減（石油由来資材からの転換）	温室効果ガスの削減（その他）

目指す姿

香川県では、土地利用型農業の経営安定のために米麦の二毛作経営が主体となっている。環境への影響は、麦の収穫後速やかにわらすき込みや焼却して水稻栽培に移るが、ワキの発生による温室効果ガス（CO₂）排出で環境負荷要因となっている。ワキの発生は、麦わらの腐熟が十分でないことや深水湛水などの水管理による影響があり、水稻生育不良の要因にもなっている。ワキ発生への対策は、間断かん水や中干しにより抑制効果を促しているが、十分とはなっていない。

このため、①麦わら腐熟促進、プラスチック被覆肥料の低減を目的とした非プラスチック窒素含有資材の投入、②水稻移植後の適正な水管理、③水稻栽培管理における中干し期間延長による、麦わらすき込み及び移植水稻水管理によるメタンガス発生抑制に向けた対策・技術の現地検証を行い、検証結果を基に普及を進める。

現在の栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
主な作業名		麦収穫	麦わらすき込み	代掻き田植	代掻き田植	中干し	防除	カメムシ防除	稲収穫	稲収穫			
技術名			耕起			7/11～10日	手散布・粒剤	手散布・粒剤		麦施肥・播種			



グリーンな栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
主な作業名				中干し	防除	カメムシ防除							
技術名				延長	中干し ドローン防除	ドローン防除							

グリーンな栽培体系等の取組面積の目標

	現状R6	目標R11	備考
（参考）対象品目の作付面積（ha）	2045	▶ 2050	水稻（麦との二毛作）
グリーンな栽培体系の取組面積（ha）	0.63	▶ -	
環境にやさしい栽培技術の取組面積（ha）	0.63	▶ -	中干し期間延長
省力化に資する技術の取組面積（ha）	0.63	▶ 650	8月中旬ピーク時のドローン防除

環境にやさしい栽培技術・省力化に資する技術の概要

〈技術の内容・効果〉

分類	産地の慣行	新たに取り入れる技術	期待される効果
環境	水稻の過剰分けつ・過繁茂抑制や、土壌中への酸素供給で根の健全化を図るため、田面亀裂幅 1 cm程度までの中干し	▶ 中干し期間の延長	水田からのメタン等のガス発生抑制
省力	いもち病・紋枯れ病・害虫防除に生育期防除と出穂7日～14日後のカメムシ防除で粒剤体系による手散布防除	▶ ドローンを活用した病害虫・カメムシ防除	散布作業の省力化と散布経費の軽減

〈技術の効果の指標・目指すべき水準〉

分類	指標	現状	目指すべき水準	備考
環境	5 日程度の中干し期間延長	5	▶ 10	田面亀裂幅 1 cm以内までとする。
省力	防除作業時間短縮	0.4hr/10a	▶ 0.15hr/10a	
			▶	
			▶	

* 環境にやさしい栽培技術のうち化学農薬・化学肥料の使用量の低減および省力化に資する技術については、原則、検証結果を踏まえて効果の指標・達成すべき水準を設定する（有機農業の取組面積拡大、温室効果ガスの削減に資する技術については、当該欄の記載は任意とする）
* 化学農薬の使用量の低減については、どの剤の使用量を削減するのか、どの剤からどの剤へ切り替えるのかが分かるように記載する

グリーンな栽培体系の普及・定着に向けた取組方針

- ・中干し期間延長は、栽培マニュアルの配布と講習会等で検証結果の説明により啓発を図る。
- ・栽培しおり配布時にJAとの連携で防除作業困難な農家へのドローン散布を推進。

関係者の役割

関係者名	香川県	JA香川県		
役割	技術指導	技術指導		

事業を活用して導入した農業機械等の活用面積の目標

農業機械名	作業内容	活用面積（R●）（ha）	備考
—	—	—	—

生産物の販売方法、消費者理解の醸成の取組等

—

* 事業において「消費者理解の醸成」に取り組んだ場合に、今後の取組方針を記載

その他